

こんな本を読んできた

高部英明

立花隆の『ぼくはこんな本を読んできた』(文藝春秋刊)を読むと、彼の怪物性に開いた口が塞がらず、自分の小ささをひしひしと感じてしまう。この秋には『立花隆のすべて』(文藝春秋11月号増刊号)が出て、改めて感心している。巻頭のメッセージは「好き嫌いこそすべての始まり」である。

社会学者の清水幾太郎は「人間は孤独の中でのみ高まる」と書いている。(ただし、これは極論。人間は社会的動物で、自分と共鳴する仲間を常に求めている。)読書は孤独。しかし、読書を通して研究に対する意欲が生まれ、人生に対する「道しるべ」を見出すことが出来る。

毎年、後期は理学部物理で「プラズマ物理学」を学部3年生(約100人)に講義している。今年で5年目。2時40分スタートでも、皆の目が必ずしも私の方を向かないので、今年は黙って黒板に「今週の一冊」と書いてから始めている。私が学生のころから読んできた本で印象深かった本を講義内容に関連付けながら(屁理屈付けて)簡単に紹介している。10月スタートから今までに紹介した本を挙げると、

(1)『X線からクオークまで(20世紀の物理学者たち)』セグレ著、みすず書房(¥4,800, 450頁, 1982年)。ちょうど息子が生まれた頃、オシメを替えつつ、読んで感動したのを憶えている。科学は無機質ではない。科学には科学者という人間のドラマがある。

(2)『エンリコ・フェルミ伝』セグレ著、みすず書房(¥2,500, 370頁, 1976年)。①を読んでセグレが気に入って、友人であり師であったフェルミについて書いた本を読んだ。フェルミ加速の説明に関連して紹介した。超一流の理論家であり同時に超一流の実験家であったフェルミ。これを読み「ようし、理論にこだわる必要は無い、シミュレーションもやってやろう」と思ったのがシミュレーションを始めたきっかけ。

(3)『ランダウの生涯』ベサラプ著、東京図書(¥700, 200頁, 1973年)。ランダウ減衰の話の前に紹介。「噛み付くので注意」と言われたランダウ。ブラソフ教授との軋轢。客員教授できていたランダウ研究所のAnisimov教授に色々なエピソードも聞いて紹介した。

この辺りで、学生から声が上がった、「え～、毎週一冊ですか～」。「何をぬかすか、毎週一冊ぐらい読め!」と心で言えど、口には出さず。

(4)『いまさら流体力学?』木田重雄著、丸善(¥1,339, 200頁, 1994年)。プラズマの流体近似。「これから流体力学!」という学生にも、イメージを掴むためのいい本だ。

(5)『電子立国日本を育てた男 = 八木秀次と独創者たち =』松尾博志著、文藝春秋社(¥2,200, 500頁, 1992年)。八木秀次は八木アンテナで有名。阪大理、初代学部長。湯川秀樹、西澤潤一先生らを世に出した名伯楽。苛烈の人でもあった。阪大が生まれた頃の生々とした雰囲気も伝わってくる。

(6)『宇宙からの帰還』立花隆著、中央公論社(¥1,200, 330頁, 1983年)。宇宙船帰還時には大気が摩擦で電離しプラズマが出来、地上との通信が3分ほど途絶える。カット・オフ効果である。プラズマ中の電磁波の説明前に紹介した。立花には頭が下がる。仏文出の彼がどうしてこんな専門外の本が書けるのだろうと、当時びっくりした。今や、彼は、臨死、インターネット。まさに怪物である。(ちなみに私の姉は立花の熱烈なファン。)

今の所、ここまで。さて次ぎの講義ではどれを紹介しようかなと、講義の準備をしつつ考えている。